

英語科における「話すこと[やり取り]」の指導と評価の改善 —ICT を活用して—

小柳亜季（京都大学大学院教育学研究科・修士課程）

<概要>

京都市立堀川高等学校（以下、堀川高校）の普通科・探究科の2年生の「話すこと[やり取り]」の指導、評価の改善に、堀川高校英語科の森田大助先生と共に取り組みました。取り組み以前は、2 か月ごとに自己評価の機会が設けられていましたが、具体的な活動を基にした記述になりにくい点が課題でした。本取り組みにおいては、中間試験・期末試験と同時期に行われる「話すこと[やり取り]」のパフォーマンステストの際に、生徒たちのパフォーマンスを録画し、その録画を基に自己評価を行う形式を導入しました。その結果、より具体的に生徒たちは自身のパフォーマンスを基に自己評価を行い、今後活かしていくことに意識的になることができました。さらに、生徒たちに振り返りを促す中で、パフォーマンステストの形式や授業内の指導を改善する契機にもなりました。一人の教師が持つパフォーマンステストの評価基準を、学年担当チームや生徒と共有し、コンセンサスを得ていくこと、そしてその中で子どもたちの自己評価の力を育てていくことについては、今後さらに取り組みを進めていく必要があります。

1. はじめに

堀川高校においては「自立した 18 歳を育成する」という教育目標が掲げられており、このために英語科において、生徒は「自分の成長したところとまだ出来ていないところを実感することができる」「授業や課題について、『やらされる』のではなく『自分のためにやる』という意識で取り組むことができるようになることが目指されています。この目標の進捗を確認するために、堀川高校の英語科においては、資料 1 の形式で自己評価を促す取り組みが行われてきました。

この自己評価シートは教師の行う成績づけに活用されるものではなく、生徒が自身の到達度を確認し、次の学びを構想するために設けられています。ただ、この自己評価シートのみでは、生徒が何の活動をふまえて、どのように自身の力が伸びた（もしくは不足していた）と考えているのか、さらに振り返りから今後の学習をどう展開させるかについて、生徒たちが深く思考することができているか、不明瞭でした。この点から、授業内での学びを振り返るための自己評価シートをどのように設計するかという点が、2019 年度の科目「学校探究ゼミナール」での取り組みに引き続き課題として挙げられました。このため、2020 年度も引き続き科目「学校探究ゼミナール」の中で、メンバー（市橋千弥・河本吉華・平松巧）と共に、堀川高校の英語科における自己評価の方法について検討することとなりました。自己評価は、これまで 4 月、6 月、8 月、10 月、12 月、2 月に行っていましたが、今年度はこれに加えて各学期（前期・後期）の中間試験と期末試験の時期に行われているパフォーマンステスト実施後に自己評価をする機会を設けました。

資料 1. 堀川高校英語科の「Self-Reflection Sheet」

21 期生 英語 CAN-DO Statements Self-Reflection Sheet

Class () No. () Name ()

1 年修了時の到達目標		達成度 (%)						
		4月	6月	8月	10月	12月	2月	
話すこと	やりとり	①身近な話題についての相手の説明や意見に対し、質問をしたり、感想を述べたりすることができる。						
	発表	①身の回りのことや調べたことについて説明したり、それについての自分の考えを、聞き手を意識しながら分かりやすく述べるができる。						
		②聞き手に正しい発音で伝えることができる。						
書くこと	①身の回りのこと、調べたこと、学習した内容、写真や図表について簡単に説明したり、それについての自分の考えを論理的に簡潔に述べるができる。							
	②身近な話題について、基礎的な文法事項に則り、短いパラグラフを作ることができる。							
聞くこと	①身近な話題に関する簡単な会話・ニュース・スピーチを聞き、概要を理解することができる。							
	②英語の発音を知り、音声のみの英語から、つづりをイメージすることができ、意味を理解できる。							
読むこと	①さまざまな話題の基礎的な英文を読み、その話題の背景や筆者の意図に留意しながら、概要を理解することができる。							
	②興味のある英語の本を積極的に数多く読むことができる。							
自立学習	①自分の成長したところとまだ出来ていないところを実感することができる。							
	②授業や課題について、「やらされる」のではなく「自分のためにやる」という意識で取り組むことができる。							
評価								

「自立する学習者」に向かう 6 Steps ~2カ月後、何ができる自分になっていたか?~

2カ月後の目標		達成できた?
4月		○ △ ×
6月		○ △ ×
8月		○ △ ×
10月		○ △ ×
12月		○ △ ×
2月		○ △ ×

自己評価について考えるにあたり、その根底にある授業の目標と評価の対応関係について検討する必要がありました。この作業のために、パフォーマンステスト自体の検討も行いました。堀川高校 21 期生が受けてきたこれまでのパフォーマンステストは、「話すこと[やり取り]」を評価するものとして、教師からの問いかけに生徒が答えるという形式で行われていました。1 回(もしくは 2 回)分の授業の時間内に、教師が生徒を一人ずつ呼び出すという形式でパフォーマンステストは実施されていました。

森田先生への聞き取りおよび授業見学を経て、従来のパフォーマンステストにおいては次の 2 点が特に課題として挙げられました。1 点目は、教室で待機する生徒の活動に目が届かないという点です。2 点目は従来のパフォーマンステストにおいては、問いも一部生徒に公表され、教師の問いに生徒が答えるのみであったため、実質的には「話すこと[発表]」の評価になってしまっていたという点でした。

このような背景をふまえ、①どのようなパフォーマンステストを行うか、②パフォーマンステスト後の自己評価をどのように行うか、という 2 点に取り組むこととしました。

2. 活動内容

本活動においては、下記の 2 点に取り組みました。

(1) パフォーマンステストの改訂

これまでのパフォーマンステストにおいて「話すこと[発表]」の評価になってしまっていたという点をふまえ、今回の取り組みにおいては生徒同士で 3 分間話し合う形式を取ることにしました。パフォーマンステストの実施形態を構想するために、一度以下の方法で試行しました(資料 2)。

資料 2. 2020 年 11 月試行テストの内容(筆者作成)

1. 試験内容

Rapid Reading Exercise (臓器移植に関する神戸大学の入試英文)に関して、教員が以下の質問をします。ペアでお互いの意見を出し合い、2 人で会話を続けてください(教員は会話には参加しません。)

“Which organ donation policy do you think is better, opt-in or opt-out?”

2. 評価規準

Content (妥当性) …与えられたテーマに即した内容を話すことができているか

Logic (主張の論理性) …与えられたテーマについて何かしらの正当な根拠を基に話すことができているか

Interaction (やり取り) …不明な点を質問する、言い換える。合意する際に相槌や意思表示をする等、やり取りがスムーズに進むための方略を用いることができているか

試行テストを行った結果、次の問題点が見出されました。1 点目は生徒に会話の進行を任せることによって、2 人の生徒の発話量が片方に偏ってしまうことがある点、2 点目は言い換えや相手の意図を確認する表現、質問する表現を用いることができず、会話が止まってしまうペアが見られた点です。12 月と 2 月にパフォーマンステストを行いました。最終的に 1 つ目の問題点については、テスト内でのやり取りの枠組みを資料 3 のように示すことで改善を図りました。

資料 3. 2021 年 2 月実施テストの内容(筆者作成)

1. 試験内容

Element Lesson 10 Euglena に関する以下の質問に Euglena に関する以下の質問に関して、ペア (A,B) でやり取り(会話)をするという内容です。時間は 3 分間です。

“How can euglena help improve the lives of people in Japan?”

進行 ①教員が A に対して、トピックに関する意見を求める。

②A が意見を述べる。

③B は A の意見に対して質問をする。A は答える。

④教員が B に対して、トピックに関する意見を求める。

⑤B は自分の意見を述べる。

⑥A は B の意見に対して質問をする。B はその質問に答える。

⑦時間が余れば教員がトピックに関する質問をする。

2. 評価規準

やりとり (Interaction)

①自分の意見が相手に伝わっている

②相手の質問に対して、適切な回答ができています

③相手の意見に対して質問ができています

妥当性 (Content)

④トピックに関連した内容になっている

即時性 (Immediacy)

⑤相手の発言に対する質問が、即時的にスムーズにできています

2 つ目の問題点については、授業内での指導から取り組みました。各授業の冒頭の 5 分で、ペアで 2 種類の活動が行われました。

1 つ目の活動は即時的に英語で説明する力を育成しようとするものです。ペアの一方の生徒はスクリーンを見て、もう一方の生徒はスクリーンを背にして座ります。生徒は、スクリーンに表示されている絵を見ながら、相手に英語で絵の描写を説明します。もう一方の生徒は、相手の発言をふまえて絵を想像し、相手の生徒の説明が終わり次第、想像した絵の様子を日本語で伝えます。

2 つ目の活動は相手の発言に対して即時に応答する力を育成しようとするものです。この活動においても、ペアの一方の生徒はスクリーンを見て、もう一方の生徒はスクリーンを背にして座ります。スクリーンを背にして座っている生徒は、流れてくる英語の会話の音声を聞き、音声内の最後の発言に対して応答します。スクリーンには、その会話のスク립トが表示されており、もう一方の生徒はそのスク립トを見ながら、ペアの相手の応答が会話の流れに適しているかを判断します。さらに、可能であれば、ペアの間に会話を継続させます。

(2) パフォーマンステスト後の自己評価

当初の課題として挙げていた、パフォーマンステスト後の自己評価をどのように行うか、という点に取り組むにあたり、本取り組みと同様「話すこと[やり取り]」に取り組んでいた酒井英樹氏らの研究を参照し、自己評価の際に録音を行う手法を取り入れました。基本的には生徒が持っているスマートフォンで記録するようにしましたが、スマートフォンを持っていない生徒たちに対しては教員側からコンピューターを貸し出すことで取り組みを進めました。

自己評価シートは、資料 4 のように今回のパフォーマンステストに即した枠組みで作成しました。1. では直感的に振り返りを行い、2. 以降で詳細に動画や音声の記録を基に振り返りを行うことで、自己評価を進めてもらいました。なお、12 月の段階で 4. を含めていない自己評価シートで取り組んだところ、「もっとしゃべれるように頑張る」というような漠然とした記述で留まってしまう例も見られました。より電子機器に残した録音を詳細に振り返ることを促すために、大西範英氏らの研究を参照し、自分の発言を書き起こす取り組みを 4. に含めました。

資料 4. 改訂版「Self-Reflection Sheet」表面

21 期生 英語 PERFORMANCE TEST Self-Reflection Sheet (2 月)

Class _____ Number _____ Name _____

1. (動画・音声を確認せず) 覚えている範囲で、自身のパフォーマンスについて感想を書きましょう。

2. 動画や音声を確認しながら、自身のやりとり (Interaction) についてまとめましょう。(箇条書き・できるだけ自分の発言に即して具体的に)

	① うまくできたこと	② うまくできなかったこと	③ ②の改善策 (実際に取り組むこと)
自分の意見の発表 (冒頭)			
相手の質問に対する 応答			
相手への質問			
自分の意見の発表 (最後)			

3. 次のパフォーマンステストでできるようにしておきたいこと。

資料 5. 改訂版「Self-Reflection Sheet」裏面

4. 動画や音声を確認しながら、自身の発言を書き起こしてみましょう。この際、パフォーマンステストでうまく言えなかった箇所については、新たにスクリプトを作り、赤線を引きましょう。

・ 自分の意見

・ 相手の質問に対する応答

・ 相手への質問

・ その他

このように自己評価の枠組みを変更した結果、生徒の自己評価は以下の点で意義のあるものに深まってきました。

1 点目は、生徒がパフォーマンスの間にファシリテーター役の先生が発したコメントを、動画を見ながら参照し、そのコメントも踏まえながら自分のパフォーマンステストを振り返ることができた点です。例として、資料 6 の会話をふまえ、生徒の自己評価シートと照らし合わせてみます(以下、資料に示されている T は教師、A~F はそれぞれの生徒とします)。

資料 6. パフォーマンス例①

T: Okay, so, how can euglena help improve the lives of people in Japan?
 A: えー, by reducing CO2 and prevent global warming
 T: By preventing global warming.
 A: Ah- yes.
 B: Okay B さん, any questions about A さん's idea?
 B: えー, How the, how process reducing CO2?
 T: Oh-, very good question, what is the process of reducing the emission of CO2? Okay, please explain.
 A: Euglena can photosynthesize and they can reduce, no, they can produce CO2, oh no no! They can reduce ...They can, あ! They have an ability to photosynthesize and they can reduce CO2, so they can prevent global warming.
 T: Okay, so, you should say, 'It uses CO2 to photosynthesize and the amount of CO2 will be reduced'とか something like that, then you explain the process of photosynthesize, the process of it reducing the emission.

録音を聞く前、A さんは図 1 のように振り返っています。その後、会話の中で得られた教師からのフィードバック(資料 6 の下線部)を参照しながら、A さんは以下のように自己評価を深めていきました(図 2、図 3)。

1. (動画・音声を確認せず)覚えている範囲で、自身のパフォーマンスについて感想を書きましょう。

自分の伝えたいことは伝えられたと思う、というか、分かってくれた(相手が優しかった)。
 相手の意見に対する質問がとつともない愚問にならなくなったので申し訳なかった。

図 1. A さんの自己評価例①

	① うまくできたこと	② うまくできなかったこと	③ ②の改善策 (実際に取り組むこと)
自分の意見の発表 (冒頭)	・文法は意識できたと思う (How ~? に対して By ~ing...) ・シンプルに意見をまとめられた	・準備していた文を忘れては言葉につまったり、うまく内容を伝えられなかった ・必要ないことまで言ってしまった	・入念に準備をする ・語彙をふやす
相手の質問に対する 応答	・相手の質問を理解して答えられた ・想定していた質問だったので準備していたよかった	・言いかねをまちがえた ・結論から言ったほうが伝わりやすいので、結論を言うのを後回しにしてみました。	・まずは結論を先に言うことから細かいプロセスなどを説明する ★話題は(大)→(小)

図 2. A さんの自己評価例

・自分の意見

By reducing CO₂ and prevent global warming.
x ing

・相手の質問に対する応答

Q: What is the process reducing CO₂ ?

Euglena have an ability to photosynthesize and they can reduce CO₂.
It uses CO₂ to photosynthesize

図 3. A さんの自己評価例③

スマートフォンに残っている記録を見返し、教師が述べた「By preventing global warming.」という一言から振り返りを深めています。さらに、「It uses CO₂ to photosynthesize and the amount of CO₂ will be reduced.」と教師が A さんの発言を言い換えたことをふまえて、「結論を先に言ってから、細かいプロセスなどを説明する」というように、自分なりに咀嚼して理解していることを見て取ることができます。

2 点目は、自分自身で自身のパフォーマンスを見返し、改善しうる点を自分で具体的に見つけることが可能になった点です。例として資料 7 の会話の例を検討してみます。先述したように、一方の生徒の発言に対して、もう一方の生徒が質問を返すという形で今回のパフォーマンステストは設計されていましたが、D さんはうまく質問を組み立てることができず、先生が代わりに質問を投げかけることによって進行していきました。

資料 7. パフォーマンス例②

例:

T: Okay, じゃあ C さん, let's begin. Okay, how can euglena help improve the lives of people in Japan?

C: Ah-, According to the draft on the textbook, it is ,uh, euglena is so highly nutritious, but it is difficult to oh-, take the same amount of vegetables, so, but biofuels can be created from euglena, so I hope biofuels rather than nutrition.

T: Okay, so it can be more effectively used as biofuel than nutritious food. Okay, so biofuel. じゃあ, B さん, please ask any questions about biofuels. His ideas about biofuels.

D: umm... What kind of えーと...

C: so, like, do you think it is safe to take an airplane running with biofuel made of euglena?

D: Yeah, I believe euglena, so it is safe, I think.

T: So, the airplane can fly as fast as gasoline?

C: Oh-, I don't know about it.

T: Okay, but it will be used as fuel like gasoline, okay.

この場面について、Dさんは図4、図5のように振り返っています。

相手への質問		言いたいことはあったけど、単語がでてこなかった。	違う質問にすれば、違う単語で置かえるようにする。
--------	--	--------------------------	--------------------------

図4. Dさんの自己評価例①

・相手への質問

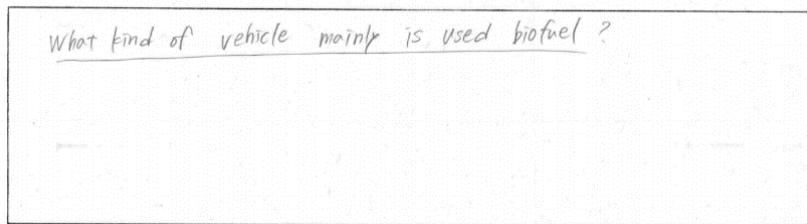


図5. Dさんの自己評価例②

このようにして、実際に言いたかったことをパフォーマンステスト後に書き出し、その上で今後再び会話中に単語が浮かばない状態に陥った場合にどのように対処するか、という方略的な側面にまで振り返りを行うことができます。このように、具体的な取り組みの後に自己評価を行う機会が設けられることによって、より自己評価が深まっているといえます。さらに、Dさんが動画を見る前に行った振り返りと比較し検討すると、電子機器に記録したものを見返したことによって、自己評価が充実したことを見て取ることもできます(図6)。

1. (動画・音声を確認せず) 覚えている範囲で、自身のパフォーマンスについて感想を書きましょう。

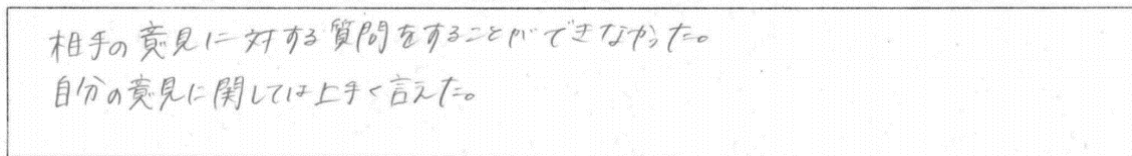


図6. Dさんの自己評価記入例③

ただ一方で、以下のような例、そして自己評価から見えてくる課題もありました。

資料8. パフォーマンス例③

T: Okay, Eさん will be the first one to answer my question. So, how does Euglena help improve the lives of people in Japan?
 E: They can remove CO2 when people burn fossil fuels.
 T: So euglena will reduce the amount of CO2. Okay, okay, Fさん please ask a question about her idea.
 F: えー? uh... How many CO2 does euglena ... reduce...?

T: Ah, okay, how much CO2 will euglena reduce?
 F: Reduce って何?
 T: Reduce は「減らす」やな。
 F: わかってへん。
 T: Very good, difficult question!
 E: I think, they can reduce CO2 a lot!
 T: A lot! Okay.

資料 8 に示したパフォーマンスの後、森田先生は、「意見を述べる際の基準を示してあげると、どのくらい留意してもらうかという点を示した方がいいかも、今の質問 [= F さんの質問] が難しかったのは、[E さんの] 発言が短かったから。この点は改善していきたい。」とおっしゃっていました。一方で、生徒 E の自己評価には、その点は含まれていません(図 7)。

	① うまくできたこと	② うまくできなかったこと	③ ②の改善策 (実際に取り組むこと)
自分の意見の発表 (冒頭)	正しい文法で言えばいい。	・ 流暢に言うこと。 ・ 正しい発音。	普段から発音を意識する。 (正しい発音をCDなどを使って耳に T=エミーン)
相手の質問に対する 応答	・ すぐに答えることができていい。 ・ 正しい文法で言えばいい。	・ 正しい発音。	普段から発音を意識して 音読する。

図 7. E さんの自己評価記入例

このことから、パフォーマンスの基準を質的に示していくことを今後の課題として挙げるすることができます。2 月に行ったパフォーマンステストにおいては、資料 3 に含まれていた評価規準「①自分の意見が相手に伝わっている、②相手の質問に対して、適切な回答ができてい、③相手の意見に対して質問ができてい(やりとり)、④トピックに関連した内容になっている、⑤相手の発言に対する質問が、即時的にスムーズにできている」という 5 つについてそれぞれ○か×か、という採点方法が用いられました。その結果、発言内容の質について生徒たちに考える機会はあまり与えられなかったと言えます。パフォーマンスの質に対する基準を設定し、生徒たちに示していく取り組み、さらにその基準の妥当性を生徒たちと話し合う取り組みを進めていく必要があります。

3. 成果と課題

本活動は、「話すこと[やり取り]」の指導と評価について取り組み、またその力を自律的に生徒たちが伸ばすことを志向したものでした。それまでのパフォーマンステストにおいては、教師対生徒の間で一往復のやり

取りのみが行われ、かつ記録が残されないことから教師からの評価に依存的でした。今回、クラスメイトとの「話すこと[やり取り]」であった点、そしてスマートフォンやコンピューターで録音・録画等を行ったことによって、お互いのパフォーマンスについて後から話し合ったり、録音・録画を見返しパフォーマンスを振り返ったりすることができました。さらに、実際のパフォーマンスを踏まえることで今後の学びにより具体的に近づけるようになった点が成果といえます。

二点目として、パフォーマンステストおよび自己評価シートの改善という点から取り組みを行いました。その過程で指導の見直しにもつながった点を、今回の取り組みの成果として挙げるすることができます。それまでも生徒同士で会話する場面は授業内で見られましたが、「質問する」という部分に特化した取り組みを含めたことで、より直接的に「話すこと[やり取り]」の取り組みとして具体化されました。

一方、パフォーマンステストの評価基準を教師間や生徒間で共有しなかった点は残された課題といえます。録画した生徒のパフォーマンスを教師間で互いに鑑賞し、どのように評価するか話し合うプロセスを経ることによって、学年担当チームで共通した目標観を持つことを目指していきたいと思えます。また、生徒に対しても具体的なパフォーマンスを例示したり、特定のパフォーマンスに対するフィードバックを共有したりすることによって、目標を共有する作業を進めていくことが求められます。

<参考文献>

1. 大西範英・斎藤嘉則「中学校英語科授業話すことにおける [やり取り] に関する一事例」『四国英語教育学会紀要』第 38 巻、2018 年、pp.55-66。
2. 小柳亜季「『主体的に学習に取り組む態度』育成のための自己評価シートの提案—堀川高校英語科との連携を通して—」『E.FORUM 2019 全国スクールリーダー育成研修：科学研究費補助金基盤研究 (B)「パフォーマンス評価を活かしたカリキュラム・マネジメントの改善方略の開発」報告書』2020 年 9 月 30 日、pp.145-151。
3. 酒井英樹・佐藤大樹・木下愛里・菊原健吾「中学校英語科における技能統合型の言語活動の指導：読んだことに基づいて話すこと(やり取り)」『全国英語教育学会紀要』第 30 巻、2019 年、pp.303-318。

(2021 年 3 月 22 日入稿)